



今村庄九郎看板

先月号の看板に記載した和鋼質前挽鋸用の東郷鋼とはどんな材料だったのでしょうか。また、この看板を掲げていた『今村庄九郎商店』とは？好奇の虫がゴンゴンと動き初めました。

明治維新後の日本では、従来の和鋼・和鉄が

鉄のふしぎ? 博物館

■24

『東郷鋼の看板 後日談』

資料1.「滋賀県の農工業」
明治43年大鋸生産数量と金額

年	産額		単価 (円)a/b
	数量(枚)b	金額(円)a	
明治37年	3,200	15,000	4.69
明治38年	5,100	29,500	5.78
明治39年	5,800	68,600	11.83
明治40年	25,000	103,300	4.13
明治41年	27,000	114,840	4.25

明治40年に清算量5倍に増え、単価が下がっています。これを洋鋼が多く使われ始めたのは明治40年頃からかも知れない。

(参考図書1. P 206~207)

た鋸はネバリがあ

考 資料1) 看板には『従来玉鋼ヲ

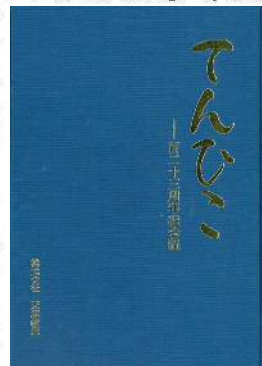
ら安価で品質の安定した洋鋼の使用へと進みました。当初は輸入に頼っていましたが、やがて洋鋼の国産化が始まります。そうした時流の中、河合洋鋼商店は明治末期、和鋼のように粘り強い洋鋼を作ろうとしました。東郷平八郎の名を商標にした「東郷ハガネ」の卸元だった同社は、英国のアンドリユー社に和鋼のサ

ンプルを送って、同等の粘りのある素材を求めました。返ってきたのは、

り、品質が良かった。そこでアンドリユー社にこの地金を用いた鋼の製造を依頼し、ようやく希望の製品を得て「河合規格」の鋼として、明治42(1909)年に販売を開始しました。

衣川製鎖工業・衣川良介社長

画像はカラーと交換しています。



二念の百周年記念誌 衣川製鎖工業 衣川良介



昭和40年3月、前挽鋸工業協同組合の解散記念(血野温泉)。右から松山松雄、八里平右衛門、今村庄九郎、樋口彦三郎、奥村金左衛門の各氏

前挽鋸工業協同組合

鍛へて木挽用前挽及 大型鋸ヲ製造セラル鍛錬師各位ヲ為メ、特に特撰鋼ヲ壁スルヲ以て有名ナル弊店特約ノ製鋼場二命シ前挽専用トシテ製セシメシ鋼ニシテ 其性合格モ玉鋼ヲ鍛へて作りシガ如ク 頗ル強靱性に富ミ歯持良ク一以下略」と書かれていきます。

『今村庄九郎商店』の記事が天彦産業様の百二十三周年記念誌に出ていました。それは昭和40年3月、前挽鋸工業協同組合の解散記念写真です。

- 【参考図書】
- ①むらの鍛冶屋 香月節子・香月洋一 平凡社 1986年
- ②河合鋼鐵 111年のあゆみ 昭和58(1983)年8月
- ③鋳物たちの庭(インターネット)
- ④天彦産業の百二十三周年記念誌 平成11(1999)年8月